

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12498

研究課題名（和文）哲学・思想から見たラテン・アメリカ

研究課題名（英文）Latin America from the Perspective of Philosophy

研究代表者

中野 裕考（Nakano, Hirotaka）

お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授

研究者番号：40587474

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、従来の日本の哲学研究ではほとんど光が当てられてこなかった、ラテンアメリカ地域を哲学という観点から考察する試みであった。20世紀以降のラテンアメリカの哲学者たちによる、ラテンアメリカ哲学についての自省的な議論を概観し、その議論が日本の哲学者たちによる日本哲学についての議論と無縁ではないという事実を明らかにすることができた。さらに研究の後半では、スペイン語ではない先住民言語による思想表現と哲学との関係にも研究を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本とラテンアメリカという両地域は、哲学という分野でこれまでほとんど往来や交流をもってこなかった。本研究はこの点で先駆的な役割を果たすことができた。とりわけラテンアメリカの哲学者たちのあいだで議論されている問題が、少なからず日本の哲学者たちのあいだで共有されている問題とも共通性をもっていることに、注意を喚起することができた。研究最終年度にペルーを訪問して現地の哲学研究者と交流することができた際に、同様の問題をペルーの哲学者とも共有できた。

研究成果の概要（英文）：This project is an inquiry of studying Latin American region from the perspective of philosophy, which has not been tried in Japanese philosophy. Especially, I draw attention to the fact that the reflexive discussion among Latin American philosophers about Latin American philosophy has contained various common arguments with the reflexive discussion among Japanese philosophers about Japanese philosophy. In addition, in the second half of the project, I advanced further research on the relationship between philosophy and expression of thought in indigenous languages other than Spanish by the proper indigenous people.

研究分野：哲学

キーワード：非西洋地域 前近代 メタ哲学

1. 研究開始当初の背景

ポスト・コロナルな問題状況が研究の主題となって久しいラテン・アメリカ文学やラテン・アメリカ政治経済研究などに比べると、哲学はこれまでこの点では相当に後れをとっていた。もちろん西洋中心主義への批判は哲学のテーマとして認知されてはいるが、その動向を主導していたのはフランスをはじめとする西洋の哲学者であった。非西洋地域の哲学者は、西洋中心主義に対する批判に取り組む場合であっても、いくつかの例外を除いて西洋の哲学者による西洋中心主義批判を受容することに集中するきらいがあった。

他方のラテン・アメリカ地域研究は、文学、政治経済学、社会学、民俗学、歴史学、芸術学、建築学等々の分野で著しい進展を見せているにもかかわらず、哲学・思想の分野は比較的取り残された状態にあった。前近代、近代を通じて、地理的に離れていたラテン・アメリカは、大航海時代や移民政策といった断片的な場合を除いて日本の思想形成にとって関係が薄かったためだと思われる。

近年ようやく哲学の分野でも、長らく西洋哲学の受容一辺倒だった各地域に蔓延していた「西洋vs.東洋」という二項対立的な比較対照の枠組みの妥当性が問い直されるようになってきた。その例としてStephanie Rivera Berruz & Leah Kalmanson (ed.), *Comparative Studies in Asian and Latin American Philosophies*, Bloomsbury, 2018や、インディアナ大学における*Journal of World Philosophies*の創刊(2016年;前身は2014年)、また後述の本研究代表者の論文等を挙げるができる。長い間、「西洋と東洋」「西洋と中南米」といった枠組のもとで、各地域の哲学者や思想家は、もっぱら西洋との対比において自己理解と自己規定を行ってきた。そこでは、単なる西洋との差異にすぎないものを、たとえば日本の特異性やメキシコの固有性とみなすといった過剰な意味づけに陥ることも少なくなかった。それが、他の非西洋地域の視点を欠いた視野狭窄ではなかったかどうか問い直されることは少なかった。

本研究代表者は、日本とラテン・アメリカの両地域に見られる「周縁地域における哲学」という共通した自己理解に注目してきた。Hirotaka Nakano, "Practical Metaphilosophy: For inhabitants of two-storey houses" (2016)や"Is there Japanese / Latin American Philosophy?" (2017)などの論文では、ラテン・アメリカ地域におけるラテン・アメリカ哲学のあり方をめぐる論争状況が、近代における日本の西洋哲学受容過程で生じたものとかかなりの並行性を示していることを指摘してきた。「日本に哲学はあるのか」「ラテン・アメリカに哲学はあるのか」という問いと、それに対する典型的な回答パターンが、両地域において共通しているのである。両地域は相互の状況をほとんど知らないままに、それぞれの地域の関心に従って同様の自問自答を行っていたことになる。ラテン・アメリカ地域の哲学者たちは、ややもするとこのような自己言及的な問題意識の強さこそがラテン・アメリカ固有の特殊性だと理解しがちである。同じく近代日本において繰り返されたいわゆる「日本特殊論」も、それ自体が日本特有の現象なのだといった認定を受けてきた。しかしそうした問題意識は、西洋哲学を規範視しながら自己反省をするよう仕向けられてきた非西洋地域に普遍的に課せられてきた構造的必然性として捉えなおす必要がある。

周縁地域の住人が文化的中心地の生産物をひたすら受容する、という不健全な構図が

らの脱却の必要は、両地域でともに150年間にわたって叫ばれてきた。第二次世界大戦中に一時東北大学に滞在していたカール・レーヴィットは、日本の哲学者を二階建ての家の住人にたとえた（『ヨーロッパのニヒリズム』）が、この問題提起を真剣に受け止めた日本の哲学者は多かった。似たようなことはラテン・アメリカにも当てはまる。すなわち西洋哲学を受容することに専心する段階から、各地域に固有の知的伝統を生かした仕方で哲学・思想の生産を行う段階へと移行しなければならないと言われてきた（Francisco Miró Quesada, *Despertar y proyecto del filosofar latinoamericano*, 1974）。にもかかわらずこの課題がすでに達成されたと認められることは、いずれの地域においても依然として多くはない。

2. 研究の目的

本研究代表者は、日本とラテン・アメリカの両地域に見られる「周縁地域における哲学」という共通した自己理解に注目してきた。Hirotaka Nakano, "Practical Metaphilosophy: For inhabitants of two-storey houses" (2016)や"Is there Japanese / Latin American Philosophy?" (2017)などの論文では、ラテン・アメリカ地域におけるラテン・アメリカ哲学のあり方をめぐる論争状況が、近代における日本の西洋哲学受容過程で生じたものとかんがりの並行性を示していることを指摘してきた。「日本に哲学はあるのか」「ラテン・アメリカに哲学はあるのか」という問いと、それに対する典型的な回答パターンが、両地域において共通しているのである。両地域は相互の状況をほとんど知らないままに、それぞれの地域の関心に従って同様の自問自答を行っていたことになる。ラテン・アメリカ地域の哲学者たちは、ややもするとこのような自己言及的な問題意識の強さこそがラテン・アメリカ固有の特殊性だと理解しがちである。同じく近代日本において繰り返されたいわゆる「日本特殊論」も、それ自体が日本特有の現象なのだといった認定を受けてきた。しかしそうした問題意識は、西洋哲学を規範視しながら自己反省をするよう仕向けられてきた非西洋地域に普遍的に課せられてきた構造的必然性として捉えなおす必要がある。

周縁地域の住人が文化的中心地の生産物をひたすら受容する、という不健全な構図からの脱却の必要は、両地域でともに150年間にわたって叫ばれてきた。第二次世界大戦中に一時東北大学に滞在していたカール・レーヴィットは、日本の哲学者を二階建ての家の住人にたとえた（『ヨーロッパのニヒリズム』）が、この問題提起を真剣に受け止めた日本の哲学者は多かった。似たようなことはラテン・アメリカにも当てはまる。すなわち西洋哲学を受容することに専心する段階から、各地域に固有の知的伝統を生かした仕方で哲学・思想の生産を行う段階へと移行しなければならないと言われてきた（Francisco Miró Quesada, *Despertar y proyecto del filosofar latinoamericano*, 1974）。にもかかわらずこの課題がすでに達成されたと認められることは、いずれの地域においても依然として多くはない。

以上のような状況を健全化するためには、西洋との対比で自己規定するだけでなく、他の非西洋地域と問題を共有したうえで、各地域の伝統と文脈の固有性を確認する作業が必要である。そこで本研究は、非西洋地域であり哲学・思想に関しては周縁地域でもある日本の視点から、従来はほとんど直接的な交流がなかったけれども類似した課題に直面してきたラテン・アメリカの哲学・思想についての概略を描くことを目指す。両地域の共通性と差異を明らかにすることで、日本とラテン・アメリカの比較思想の基礎を

形成したい。大まかに言うなら共通性とは、両地域が19世紀半ばごろから現在に至る国民国家形成過程に入り、近代的な大学教育課程の一環として西洋哲学を集中的に受容し始めたという点である。それに対して両地域の差異は無数にあるが、これもあえて哲学・思想という観点だけから画期を区切り図式的に単純化すると、前近代期の学問伝統の形態と植民地時代の有無が重要である。もちろんこれ以外にも、たとえば日本における太平洋戦争と敗戦の経験や、メキシコにおける独立と革命の二段階にわたる近代化など、考慮すべき点が多い。けれども両地域の差異を問う視座を確保するためにも、前近代の伝統、植民地時代、国民国家形成期という時期区分を仮説的に設定して研究を進めてみたい。

3. 研究の方法

本研究は、哲学を専門とする中野裕考が研究代表者となり、ラテンアメリカ地域研究を専門とする長谷川二ナが研究分担者となる共同研究としてスタートした。ここから、ラテンアメリカ地域に関して、哲学面と地域研究面の両方からアプローチする予定であった。ただ、長谷川二ナが1年限りで研究分担者から外れたため、地域研究面でのアプローチが困難になった。本来は植民地化以前の中南米文明、植民地時代、国民国家形成期以降という三つの時代それぞれに関して順に研究を進めていく予定だった。しかしこのような事情ゆえに、哲学面からアプローチしやすい分野から研究を進めるという方針を採らざるをえなかった。その結果、植民地時代以前と国民国家形成期以降に研究が集中し、植民地時代に関してはMauricio Beuchot, *Historia de la filosofía en el México Colonial* の研究成果を吸収するにとどまった。とはいえ、植民地時代以前の先住民文明の知的遺産と哲学の関係についての議論、国民国家形成期以降のラテンアメリカ哲学のオリジナリティをめぐる議論に関しては、現地の哲学者たちの議論を辿る研究がなされた。

4. 研究成果

本研究は、従来の日本の哲学研究ではほとんど光が当てられてこなかった、ラテンアメリカ地域を哲学という観点から考察する試みであった。20世紀以降のラテンアメリカの哲学者たちによる、ラテンアメリカ哲学についての自省的な議論を概観し、その議論が日本の哲学者たちによる日本哲学についての議論と無縁ではないという事実を明らかにすることができた。さらに研究の後半では、スペイン語ではない先住民言語による思想表現と哲学との関係にも研究を進めた。研究最終年度にペルーを訪問して現地の哲学研究者と交流することができた際に、同様の問題をペルーの哲学者とも共有できた。

次のような研究成果があった：

学会報告

中野裕考、板東洋介、Mario Mejia Huaman, Adalberto de Hoyos, Philosophical Significance of Pre-Modern Intellectual Heritage, 日本哲学会International Session報告, *Tetsugaku* 73, xxix-xxxii, 2022

招待講演

Importancia del pensamiento originario, Universidad Ricardo Palma, 2022年9月

Importancia del pensamiento originario, Viernes de la filosofía, Universidad San Antonio Abad de Cuzco, 2022年9月

Que relacion tienen la filosofía y la ciencia?, Conversatorio de filosofía, Universidad de Lima, 2022年9月

著書

Hiroataka Nakano (ed.), *Pre-Modern Thoughts and Philosophy. From Mexican, Peruvian, and Japanese Perspective*, Ochanomizu University, 2022).

学会ワークショップ

中野裕考、王青、河野哲也、長野邦彦「哲学あるのかという問いは何を意味するのか
周縁に定位した哲学」、日本哲学会第82回大会

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中野裕考
2. 発表標題 漢意批判の普遍化可能性 「宣長問題」の比較思想的検討
3. 学会等名 比較思想学会東京例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中野裕考、板東洋介、Mario Mejia Huaman, Adalberto de Hoyos
2. 発表標題 Philosophical Significance of Pre-Modern Intellectual Heritage
3. 学会等名 日本哲学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中野裕考、王青、河野哲也、長野邦彦
2. 発表標題 「哲学はあるのか」という問いは何を意味するのか 周縁に定位した哲学に向けて
3. 学会等名 日本哲学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Hiroataka Nakano	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Ochanomizu University	5. 総ページ数 65
3. 書名 Pre-Modern Thoughts and Philosophy. From Mexican, Peruvian, and Japanese Perspective	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>招待講演 Importancia del pensamiento originario, Universidad Ricardo Palma, 2022年9月 Importancia del pensamiento originario, Viernes de la filosofia, Universidad San Antonio Abad de Cuzco, 2022年9月 Que relacion tienen la filosofia y la ciencia?, Conversatorio de filosofia, Universidad de Lima, 2022年9月</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	H a s e g a w a N i n a (Hasegawa Nina) (70308112)	上智大学・外国語学部・教授 (32621)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ペルー	Universidad Ricardo Palma			
メキシコ	Instituto Politecnico Nacional			